

いる。②についても手掛けは始めているが、公務におわれて未完成である。進まない大きな理由は、殆どの回答内容が記述式であり、1園からの返信が、A3の回答紙3枚、という点にあり、それらの整理分類にかなりの時間を要している点にある。多忙をきわめる保育園・幼稚園から回答をいただき感謝と嬉しい悲鳴を上げているのであるが、これらのまとめには今後まだ少し時間を要す

る予定である。

今後の予定として、今夏に「研究ノート①」として「保育園と幼稚園において実践されている歌唱教材の一覧表」の第一次資料をまとめ、それに関する考察を行い、冬には「研究ノート②」と題して音楽理論的分析にとりかかり、来年早々にはその発表をしたいと考えている。

就学前教育における発達課題とその遂行——幼保一元化と小学校への接続

研究代表者：子ども学科 佐々 加代子

共同研究者（嘱託研究員）：梅沢 好文・渡邊 和弘・福嶋 一恵

I. 研究目的

小学校現場では小1問題のみならず、各学年において学級崩壊も珍しくなくなった。これは就学前教育の問題でもある。小学校への接続がスムーズに移行していくには、家庭における保育のみならず、多くの子どもたちが乳幼児期を過ごすことになってきた保育・教育機関の保育・教育内容の検討が欠かせない。その子どもたちの乳幼児期からの発達の連続性における視点とそこに見出せる問題点は、保育・教育機関の内容によっても、そこにいる専門職によっても見出しがたの違いがある。育ちの時期の年齢が同じであるのに、育成機関が異なることよっての違いもかなりある。幼保一元化がうたわれてもなお、実際現場においては、その成果が見えてこない。本研究は、幼稚園、保育園、認定子ども園の現場の保育・教育の実践をすすめながら、個々の子どもの発達課題、共通する子どもたちの発達課題、および、運営側の課題について見出して点検・修正しながら、一元化にかかわる内容検討、小学校への接続について検討し、就学前教育に寄与することにおく。

II. 2010年度は以下のようにすすめて成果を得た。

1. 幼稚園、保育園の実際を把握すること

①学校法人所沢文化幼稚園（6園の幼稚園，1保育園）東京都内の公的保育園，民営の保育園などの実際について（保育言語研究会などで資料として提供される内容も含む）佐々は少なくとも、毎月1-2回現場に出向いて育ちの過程についての観察をし、個別あるいは、共通する改正点などについて、とりまとめ、保育・教育実践に生かせるようにした。行事についても参加観察しながら、取りまとめた。

2. 共同研究者たちとの研究会で（毎月平均1回は開催）上記の保育・教育の実際について得られたこと、発達課題などの確認を行い、その背景要因について検討した。保育・教育課程への組み入れを行った。現在の子どもたちに負荷がおおきいのではないかとみなされたことについては、ゆるやかにしていくこと、対応の難しい子どもが多い場合には、1週間、1ヶ月のなかで内容が可能になるように、ゆるやかな運営を行うようにした。所沢文化幼稚園関係では、教員、保育士たちへの伝達などは、園長経由で行った。それ以外

- の保育園については、保育言語研究会において、担当者自身との検討により、保育における対応を中心に修正を加えていった。
3. 教育課程における組み換え、修正に関しては、年間通じて、あらためてみなおし、無理のないような内容変更にしていくようにした。
 4. 就学前教育を今年度は3-5歳児を中心におきながら、教育課程、保育課程とつきあわせながらすすめた。幼稚園においてはとりわけ3歳児の入園の4月当初の個別の基本的生活習慣の把握が必要であることがより鮮明にみえてきた。家庭とは異なるトイレの使用にかかわる排泄、弁当よりは給食の食べ方などによって、みえてくる食にかかわる習慣を含む内容、教室・保育室内外の遊びの観察から、個別の体の育ちや遊びの詳細観察から、個とクラス集団の、その時期における保育・教育者側の運営にあたる場合の留意事項が見えてきた。それらの一つひとつについて、できるだけ幼稚園、保育園の入園後の初期段階において、丁寧にすすめていくことが、個人の子どもの場のなじみ方や安定感や人間関係の育ちにも関連しているということがわかった。個人としての子どもが園生活になれてくるにしたがって、クラス集団がより生きてくることが見えてきた。ただ、その把握力や細やかに個別に対応するという力は、教員によって差が生じることもみえてきた。それらをできるだけ小さくすることが課題となり、園長・主任側からの繰り返しの丁寧な助言が欠かせないことがわかった。
 5. 幼稚園においては、この3歳児の初期段階のみならず、4歳、5歳のクラス替えのときに、あらためて個々の生活習慣や遊びの観察によってできていることとできないことの区分をすること、加えて、集団で行う行事という場における子どもの姿の観察をおこない、教員・保育士などの集団内における大人の言葉を聞きとめていくことやいわゆる園生活における規範などの理解の仕方などについての把握を行った。なかなかわかりにくい子どもたちには、席をどの場にするのかについての工夫、個別の対応をすることなどの工夫をこらした。4月当初からの初期段階の把握とその後の対応によって、いわゆる小1問題というくくりの内容でおさえることはできていない。
 6. 園生活に初めてなじむ子どもたちの受け入れについて、個別にかかえる問題を初期段階にすすめていくことによって、子どもが園生活になじみ、そこで生き生きと暮らし始めていくということが見て取れてきた。その結果として、クラス運営においても教員の個人的な展開によって教育・保育課程が進んでいったように思われた。いわゆる「生きる力」がそれぞれの子どもたちからあふれてくるようになっていたように思われた。
 7. この1年の成果を踏まえて、さらに2年目は、認定こども園、保育園の0-2歳児までを加えて検討を行う。さらに実践成果をふまえて、幼保一元化、および、小学校への接続への対応法としての教育課程遂行上の視点・留意点、などのまとめをすることにある。
- なお、本研究は、共同研究者のみならず、佐々の主催する保育言語研究会のメンバーたちとも同時進行でおこなってきた。公立、私立保育園の保育については、その担当の担当する年齢層ということでの検討になっているが、1年の保育実践を1ヶ月ごとにふりかえりながら次の保育実践を組み立てていくというようにすすめてきた。それらの資料も次年度の資料になる。
- 研究費については、図書費・消耗品扱いになった図書（文献）と、資料整理のアルバイト費用、先に佐々がまとめた発達表の印刷代に使わせていただいた。多くの担当者たちが育ちの過程を見直していく資料になった。ここに感謝申し上げる。